

宗教と戦争

大森海太

人間がこの世に現れて以来、今日にいたるまで争いごとの絶えたことがない。その原因といえば、それ以前の鳥やケダモノたちの時代も含めて、メスをめぐるオスどうしのバトルを除けば、ほとんどは限られた食糧を求めての「縄張り争い」であると言つてよい。数万年前、ホモサピエンスがネアンデルタール人などの旧人類を絶滅に追い込んだのも、生存圏をかけての戦いであつたのだろう。

歴史上の幾多の戦争の多くは領土をめぐる縄張り争いであつたし、最近の中国の海洋進出、台湾問題や、クリミア半島をめぐる東西の確執なども、広い意味では同じ範疇に入る。さらにこれからは宇宙戦争とかいって、月や火星の表面でも取り合いをするのかと思うと、いやはやという気持ちになる。

というわけで動物はみな自分たちの生きていく場所を確保し、或いは拡げるために戦つのだが、ひとつだけ人間にあって鳥獣にはない戦争の原因がある。それが宗教だ。

宗教の起源はよく分からないが、いにしえの人々が種族の安寧や豊作を願ひ、太陽や月や高くそびえる峰々を神と崇めて、祈りをささげたであろうことは想像に難くない。

やがて文明発祥の地と言われるメソポタミアでは、灌漑技術の改良により麦などの余剰な収穫が生まれ、これにより生産に携わらない支配階級が誕生し、宗教と結びついて神権政治へと発展していく。この動きはエジプトに伝わり、また黄河流域における商、殷なども一種の神権政治であつたと言われる（時代は後になるが、倭国の卑弥呼もそのようなものか）。

このようにして生まれた自然信仰は次第にその民族の精神的な支えとなるいつぼう、排他的な性格を帯びるようになり、ときには前述の縄張り争いと結びついて、戦争の大きな要因を占めるようになってくる。今日にいたる世界史のなかでは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三大一神教が関与するところでこの傾向が著しいと言える。これらについて、詳しいことは次回に申し上げる。